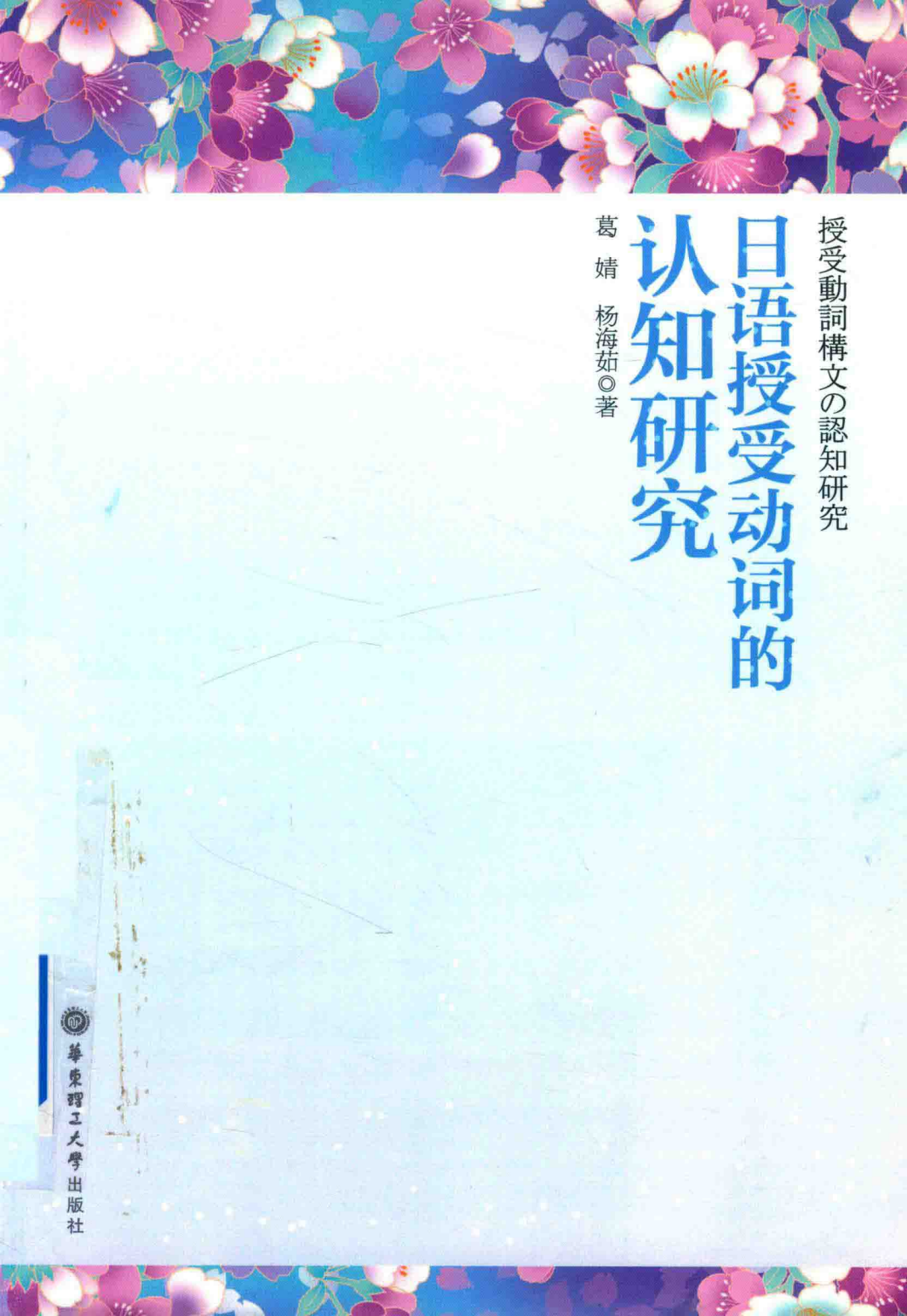




授受動詞構文の認知研究

日语授受動詞的 認知研究

葛婧 杨海茹◎著



華中理工大學出版社

授受動詞構文の認知研究

日语授受動詞的 認知研究

葛 婧
杨海茹◎著



华东理工大学出版社

上海

图书在版编目(CIP)数据

日语授受动词的认知研究/葛婧,杨海茹著. —上海:
华东理工大学出版社,2015.8
ISBN 978-7-5628-4323-8

I. ①日… II. ①葛…②杨… III. ①日语-动词-研究
IV. ①H364.2

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2015)第 146288 号

日语授受动词的认知研究

著 / 葛 婧 杨海茹

责任编辑 / 金美玉

责任校对 / 李 炜

封面设计 / 戚亮轩

出版发行 / 华东理工大学出版社有限公司

地 址: 上海市梅陇路 130 号, 200237

电 话: (021)64250306(营销部)

(021)64250875(编辑室)

传 真: (021)64252707

网 址: press.ecust.edu.cn

印 刷 / 上海当纳利印刷有限公司

开 本 / 890mm×1240mm 1/32

印 张 / 8

字 数 / 236 千字

版 次 / 2015 年 8 月第 1 版

印 次 / 2015 年 8 月第 1 次

书 号 / ISBN 978-7-5628-4323-8

定 价 / 58.00 元

联系我们: 电子邮箱 press_wy@ecust.edu.cn

官方微博 e.weibo.com/ecustpress

天猫旗舰店 <http://hdlgdxcb.tmall.com>

华东理工大学出版社



扫一扫 用手机访问本馆网站

はしがき

本書の内容は「授受動詞構文の認知研究」と言える。本書の主な目標は以下の三つである。

(A) 日本語の授受本動詞ヤル・クレル・モラウの三分化の成立およびその構文特徴に、三つの動詞が持つどんな意味要素が働きかけているのか、ヤル・クレル・モラウ及びその補助動詞文の特徴として取りあがられた「視点」「共感度」「方向性」「恩恵性」の本質は何なのか、また、それが三動詞の意味構造内でどう位置づけ、その構文構造にどう対応するのか、明らかにしようとする。

(B) 授受本動詞から授受補助動詞への拡張に関しては、「物の移動」から「行為の移動」への転換として捉えているのが主流だったといえよう。「物の移動」「行為の移動」という言い方自体からわかるように、その捉え方は、本動詞構文ではヲ格名詞句、補助動詞構文では前接動詞に焦点を当たっているのである。その結果、本動詞が有する恩恵性をヲ格名詞句の「物」に求めたり、補助動詞文では、前接動詞の意味を一方的に語ってしまうことになる。勿論、構文全体の構成部分として、ヲ格名詞句や前接動詞などは、本動詞構文や補助動詞構文の特徴を考察する際、避けられない直観的な存在になるが、従来の研究から見れば、その面に注目しすぎて、本動詞と補助動詞そのものの意味構造の関連を究明する。

(C) さらに、日本語の授受表現の特徴を浮き彫りにするために行われた対照的研究では、英語・韓国語のほか、中国語との対照が多く語られてきたが、いずれも言語現象の指摘にとどま

べき筋はないが唯好意的にする」場合、「害を利として表す」場合の3種類を考えている(松下大三郎1928:398)。また、「自己」は「必ずしも説話者そのものばかりではなく、他人のことであっても其の人の身になって言えば其の人が自己化される」(松下大三郎1928:400)と述べている。問題点が残る研究でもあるが、「恩恵」という意味的特徴の研究、「話し手」という概念にかかわる人称・視点制約という構文的特徴に注目されているところは先見的しかも示唆的である。後程の授受表現に関する授受表現の研究基盤を打ち立てたと言える。

0.1.1.1 意味的特徴に関する研究

松下大三郎(1928)では、「利益態」と称しながら、「余り憎らしいから殴って遣った」(松下大三郎1928:398より)のような恩恵を表さない例を挙げてはいるものの、そのような非恩恵性について具体的に何も述べられなかった。その後の授受表現の意味的特徴に関する研究では、恩恵性だけではなく、非恩恵性も授受表現に存在する(鈴木丹士郎1972、山田敏弘2004)と考へ、さらにその恩恵性はモノに対する「好ましさ」から生まれる(益岡隆志2001、楊玲2008)という、恩恵性が生じる理由を説明しようとする試みや、非恩恵性には具体的にどのような意味が取れるのか(豊田豊子1974、山田敏弘2004)、その非恩恵性はどこから生じたのか(豊田豊子1974、大江三郎1977)などを説明しようとする研究も見られる。

また、その恩恵性と非恩恵性は別々に存在し、分裂された意味特徴ではなく、その間に連続性があると主張する研究も少なくはない。その連続性に関する考察視点として、文脈からの影響(豊田豊子1974)、単なる意味の問題としてではなく、モダリティ表現への移行(仁田義雄1991、山田敏弘2004)、授受本動詞から授受補助動詞への意味拡張(由井紀久子1990、于康2008)に求めるものなどが挙げられる。

さらに、「恩恵」という意味が待遇表現、対人機能へと繋がられ、授受表現の談話的機能を語るまで研究視野が広げられた。明

$$C_1 \in C_0$$

構文上では、 C_1 は C_0 より、構文の内側にある。

(C_0 は「認知主体」になれる発話参与者(「話し手」「聞き手」)、 C_1 は主文参与者(主文主語又は他の主文要素))

日本語の二重授受表現はこの二つの条件の下で成立していることも例証した。

こうして、語彙にある主体的意味と客体的意味の増減は、語彙的要素から文法的要素へとつながっていることがわかった。また、異なる言語間に対応し切れない言葉も、客体的意味の部分が似ていても、主体的意味の部分まで類似できないところから来ていると考えられる。

第5章では、中国語の「給」の動詞から介詞への拡張過程を日本語の授受動詞の拡張と見合わせてみた。動詞段階の対照は主に「給」と「やる」「与える」の間で行った。「給」の意味ネットワークを分析し、主・客体的意味の結合様態が「やる」と「与える」の中間状態にあるため、「やる」と「与える」はその意味ネットワークの各部分にそれぞれ当たることがわかった。また、その主・客体的意味の結合方式により、「給」の文法化への拡張ルートは線状になり、線状のアクション・チェーンのどの部分がプロファイルされるかによって、「処置式」「被動式」という構文になる。それは、拡張ルートが放射状になる「てやる」「てくれる」「てもらう」に見られない。ただし、放射状をたもっているながら、「CAUSE RESULT」というコーサルチェーンが際立っている「てもらう」構文だけには、「使役構文」「受身構文」と平行的にとらえる特徴が見られるところが興味深いのである。

著 者

2015.3

序章

第1章 「主観性」の認知的多重構造1

第2章 各授受本動詞構文のスキーマ

2.1 日本語授受本動詞三分化の認知基盤	44
2.1.1 授受本動詞構文のスキーマ	45
2.1.2 まとめ	55
2.2 授受本動詞の輪郭	56
2.2.1 ヤルとアタエル	57
2.2.2 モラウとウケトル	71
2.2.3 モラウとエル	81
2.2.4 まとめ	88
2.2.5 「収受」動詞の受身形	88

第3章 構文拡張に見られる認知プロセスの特定

3.1 Vテヤル構文	96
3.1.1 テヤル構文の多義性に関する記述	97
3.1.2 ヤルの多義性	105
3.1.3 ヤルと～テヤルの多義性の対応	109
3.1.4 授受を表すテヤル構文のスキーマ	120
3.2 Vテクレル構文	129
3.2.1 「XがYにZを」Vテクレル	133
3.2.2 「XがZを」Vテクレル	137
3.2.3 「XがYを」Vテクレル	139
3.2.4 REとCの関係を明示化する手段	141
3.2.5 「Xが」Vテクレル	142
3.3 Vテモラウ構文	145
3.3.1 「XがYにZを」Vテモラウ	146
3.3.2 「XがYを」Vテモラウ	150
3.3.3 「XがZを」Vテモラウ	155
3.3.4 「Xが」Vテモラウ	161
3.4 補助動詞構文のスキーマ	167
3.4.1 補助動詞構文のスキーマ	167

3.4.2 補助動詞構文スキーマの応用	167
---------------------------	-----

第4章 二重授受構文成立に関する認知的仮説

4.1 異質的授受動詞の承接	172
4.1.1 与えて+やる/くれる/もらう	173
4.1.2 受け取っ/得て+やる/くれる/もらう	176
4.1.3 まとめ	180
4.2 同質的授受動詞の承接	181
4.2.1 仮説条件の提案	181
4.2.2 [授受本動詞+授受補助動詞]	182
4.2.3 [授受補助動詞+授受補助動詞]	189
4.3 まとめ	201

第5章 認知相対論からの中国語の「給」との対照

5.1 中日対照の先行研究	202
5.2 「給」の意味構造のネットワーク	204
5.3 「給」と「やる」「与える」の対応	208
5.3.1 「給」Ⅰの場合	208
5.3.2 「給」Ⅲ～Ⅳの場合	211
5.3.3 「給」Ⅴの場合	213
5.4 「給」の文法化にみられる段階性	215
5.4.1 「Ⅴ 給」への拡張	215
5.4.2 動詞「給」から介詞「給」への拡張	218
5.5 中日授受動詞文法化の差異および動機付け	225
5.5.1 「給」と「やる」「くれる」「もらう」に見られる文法化の相違	225
5.5.2 文法化の相違に見られる認知基盤の相違	227

終章

6.1 語彙と構文の連続性	229
6.2 これからの展開	232

6.2.1 授受表現と配慮表現の関係	232
6.2.2 文法要素としての「認知主体」の応用	233
参考文献	235

序章

多くの言語には、授受を表す動詞が二項対立をなしている。例えば、英語の「give」「receive」、中国語の「給」「得」など。日本語のような三項対立を持つ言語が極めて稀であり、一人称からの方向性によって授与の動詞を「やる・くれる」に使い分ける言語は日本語の他には見出されないと指摘されている。このような特殊性が目立ち、日本語の授受動詞の対立する形式の数とその対立要因に関する観察が多く見られている。ヤル・クレル・モラウといった動詞の意味と構文のみではなく、テヤル・テクレル・テモラウといった補助動詞表現も研究対象になり、いわゆる本動詞、補助動詞の関連性に注目し、意味的特徴、構文的特徴などを中心に、異なる研究対象から研究角度まで様々な考察が行われてきて、数多くの成果が挙げられている。本研究の踏み台として、先行研究の流れを一通り整理しておきたい。

0.1 日本語の授受動詞構文に関する先行研究の概観

0.1.1 意味・構文的特徴に関する研究

意味・構文を同時に取りあげ、しかも最も初期的な先行研究とされる松下大三郎(1928)は、授受補助動詞を「形式動詞」と称し、それを中心に考察したものである。松下(1928)は補助動詞構文を「利益態」と称し、人称と視点の制約と絡め「～テヤル＝自行他利態」「～テクレル＝他行自利態」「～テモラウ＝自行自利態」と規定されている。「利益」に関して、「自己の動作が他人に対する恩恵であるという」場合、「自分は局外者であって他人のことに干渉す

べき筋はないが唯好意的にする」場合、「害を利として表す」場合の3種類を考えている(松下大三郎1928:398)。また、「自己」は「必ずしも説話者そのものばかりではなく、他人のことであっても其の人の身になって言えば其の人が自己化される」(松下大三郎1928:400)と述べている。問題点が残る研究でもあるが、「恩恵」という意味的特徴の研究、「話し手」という概念にかかわる人称・視点制約という構文的特徴に注目されているところは先見的しかも示唆的である。後程の授受表現に関する授受表現の研究基盤を打ち立てたと言える。

0.1.1.1 意味的特徴に関する研究

松下大三郎(1928)では、「利益態」と称しながら、「余り憎らしいから殴って遣った」(松下大三郎1928:398より)のような恩恵を表さない例を挙げてはいるものの、そのような非恩恵性について具体的に何も述べられなかった。その後の授受表現の意味的特徴に関する研究では、恩恵性だけではなく、非恩恵性も授受表現に存在する(鈴木丹士郎1972、山田敏弘2004)と考え、さらにその恩恵性はモノに対する「好ましき」から生まれる(益岡隆志2001、楊玲2008)という、恩恵性が生じる理由を説明しようとする試みや、非恩恵性には具体的にどのような意味が取れるのか(豊田豊子1974、山田敏弘2004)、その非恩恵性はどこから生じたのか(豊田豊子1974、大江三郎1977)などを説明しようとする研究も見られる。

また、その恩恵性と非恩恵性は別々に存在し、分裂された意味特徴ではなく、その間に連続性があると主張する研究も少なくはない。その連続性に関する考察視点として、文脈からの影響(豊田豊子1974)、単なる意味の問題としてではなく、モダリティ表現への移行(仁田義雄1991、山田敏弘2004)、授受本動詞から授受補助動詞への意味拡張(由井紀久子1990、于康2008)に求めるものなどが挙げられる。

さらに、「恩恵」という意味が待遇表現、対人機能へと繋がられ、授受表現の談話的機能を語るまで研究視野が広がられた。明

確に授受表現を待遇表現として論説したのは、宮地裕(1965)で、その後上野田鶴子(1978)、山本和子(1991)、沼田善子(1999)、山本裕子(2002、2003)など、一連優れた研究が挙げられる。授受表現と発話行為との関連では、依頼表現が最も多く論じられている。授受補助動詞構文の統語的機能と依頼という発話行為遂行との関連について論じているのは、山岡政紀(1989)である。山田敏弘(2004)では、その依頼形式が恩恵という意味と密接な関係を持ちながら、モダリティ形式へと完全にずれ込んでいくものとして考え、テヤル・テクレル・テモラウの3構文を依頼表現として使われる場合モダリティを表すと述べられている。森田良行(1985)では、「～てください」と「お～ください」の違いを取り上げている。他、「～てくださる」「～ていただく」の使用に関する現代人の敬語意識における心理的傾向を指摘した金澤裕之(2007)もある。談話的特徴に関しては、大江三郎(1975)、久野暉(1978)では、実際の談話に授受表現がどのような機能を担っているのか立ち入った考察が行われていないが、ある文脈内で用いることが可能かどうかという態度は示されている。その観点を継いで、山田敏弘(2004)は連文、連文中の複文及びその応用としての名詞修飾節主名詞の同定に関して考察を行った。橋元良明(2001)は、語用論的角度から授受表現を語られている。

0.1.1.2 構文的特徴に関する研究

一方、松下大三郎(1928)の人称・視点制約に関する指摘を受け、大江三郎(1975)では、「視点の軸」、久野暉(1978)では、「共感度」を立て詳細な論考を行っている。寺村秀夫(1982)は、さらに授受表現の人称制限は、話者を最もウチ、第三者を最もソトとした相対的な階層上の方向性から来ていることを、明確的しかも正確的に指摘している。近年に至って、その広く受けられた「共感度」や「ウチ・ソト」による人称・視点制約の規定に疑問を抱き、テクレルを中心に話し手の認識や認知主体などの概念を授受構文の考察に導入したものに、田中千景(1999)、澤田淳(2004、2007)などが挙げられる。

人称性と繋がる問題として、授受本動詞、特に授受補助動詞構文の名詞に焦点を置かれている。授受という事態に出る参与者はそれぞれ構文中どういう格で表されるのかが問題となる。その中、最も多く論じられてきたのは受益者(与益者)がどのような格が取れるかという問題なのである。言語事実に徹底的に忠実に考察した大曾美恵子(1983)のほか、生成文法の枠組みから理論的な考察を行った三宅知広(1995)もあった。受益者(与益者)だけではなく、動作主の格問題も取り上げられている総括的な研究として山田敏弘(2004)が挙げられる。

動作主の問題をヴォイスの視点から考察する研究視点もあった。松下大三郎(1928)、宮地裕(1965)、村木新次郎(1991)にはヤル・クレル対モラウという対立が成立するという指摘があったが、テヤル・テクレル・テモラウを受身文との比較は多く行われてきた。量から見ればテモラウに関する研究が最も多かったといえる。テモラウ構文には動作主への働きかけ性があるという捉えは、「自行自利態」が「自主的被動」と呼ばれている松下大三郎(1928)をはじめ、奥津敬一郎(1982)、仁田義雄(1991)などに見られる。仁田義雄(1991)は、さらにテモラウ構文には受身的、使役的という二通りの用法があると考え、受身的テモラウ構文を有標形式としてヴォイスの中に位置づけている。その他、山田敏弘(2004)では、文法カテゴリーの階層における補助授受動詞構文の位置を、特にアスペクトとの係わりから論じていた。

0.1.2 対照言語学の観点からの研究

日本語の授受表現の特性を浮き彫りにするには、それ自体に注目するだけではなく、他言語の関連事実と対照的に見ることは必要である。従来の日本語の授受表現研究ではこの点も十分重視されている。

汎言語的な考察として、奥津敬一郎(1983)では、広い視点から英語、韓国語、中国語などとの対照研究をおこない、山田敏弘(2004)では物の授受を表わす形式が二項対立をなす諸言語(英語

をはじめ7語派約14種)を比較し、英語のgive とreceiveの対立のような与え手側・受け手側いずれの立場から授受を捉えたものであるかという二項対立として現れることが多い、特に系統に偏ることなく広く見出せる(p337)、と言語間の相違ではなく共通性を指摘したものである。

一対一の研究では、語種別に挙げるができる。日本語と中国語の対照研究については、奥津敬一郎・徐昌華(1983)では、テモラウと「请」とについて考察した以外、中島悦子(1994)では、使役の「てもらう」・「ように」構文と中国語の「讓」構文について考察した。王婉莹(1998)では、「せる・させる」「～てもらう」「～ように言う」の日中語対照研究を中国人学習者の習得からおこなわれ、王燕(2002)では、使役表現と授受表現と結合させた表現の意味が分析されている。松浦とも子(2004)では、中国語母語話者の授受表現における母語の影響から「使役型てもらう」構文の日中対照研究がおこなわれた。韓国語との対照には、林八龍(1980)、金珉秀(2000)があり、タイ語については江田すみれ(1983)、フランス語については中川良雄(1988)などがある。

対照言語学と密接的な関係を持ちながら、考察角度がまた異なっているものに、日本語教育の立場に立つ研究がある。前掲の王婉莹(1998)、松浦とも子(2004)はそうであるが、堀口純子(1983)、田中真理(1996)など、学習者の誤用から論考を進めているものも挙げられる。

0.1.3 その他の観点からの研究

授受表現の使用は日本でも地域差が呈している。その実態を究明するため、通時的な研究と方言に関する記述もおこなわれている。本研究では方言との関わりが薄いため、その面の研究実績を特に集めていないが、通時的な研究は授受表現の現の使用状況にいたるまでの経緯を明らかにし、その説明の裏づけともつなげるため、先行研究調査から排除することはできない。堀口和吉(1984)は、ヤルを授受動詞としての「遣る」と行う意味を表す「行

「(や)る」の意味誕生を記述した興味深い研究である。古川俊雄(1995、1996)は、クレルとヤルの分化や、テクレルの非恩恵的用法の発生などを記述した。萩野千砂子(2007)は授受動詞の視点の成立を史的資料に求め、その意味拡張のつながりを説明しようとしている。

0.2 残された課題

先行研究の流れから、授受表現に対する考察はその構文的・意味的特徴に焦点を置かれているということがわかる。一言でまとめれば、構文的特徴では、視点の問題(人称制約・ヴォイスなどとかかわる)、意味的特徴では、恩恵性(恩恵・非恩恵も含め)の問題が核となっている。構文的特徴・意味的特徴を別々に取り上げ論考したものが量的からいっても圧倒的であるが、両者の関連性を認め、論考を進めたのは、上野田鶴子(1978)、山田敏弘(2004)以外、調べた限り、ほとんどないようである。山田敏弘(2004)では、受益者が、ベネファクティブによって描写されている現実の事態において関与者であるかどうかという意味的基準によって、直接構造と間接構造を立て分けている。直接構造とは動作・行為の直接の関与者がベネファクティブ構文でも受益者となっている場合である。

a 田中は私に本を売った。→b 田中は私に本を売ってくれた。
[直接構造]

間接構造とは動作・行為に直接関与しない間接的な参加者が、ベネファクティブにおいて受益者となるものである。この場合、通常は複合格助詞ノタメニ、あるいはノカワリニが用いられる。

a 田中は走った。→b 田中は私のために走ってくれた。[間接構造]

意味・構文の関連性を説明しようとする山田敏弘(2004)の「直接構造」「間接構造」に関しては、山岡政紀(2005)が指摘されたように、

「主観的方向性」の適用範囲は直接構造に限られる。これは、間接構造の場合、恩恵の“移動”というアナロジーが適切に機能しないという事情を表わしている。逆に、山田敏弘はそうした事情を認識したうえで敢えて「方向性」という用語を用いるために、両構造の立て分けが必要だったとも言える。

換言すれば、「直接構造」「間接構造」は、意味・構文の関係を説明するために設立されたものでありながら、それをもって、ベネファクティブの意味と構文の関連性を説明しきれないということになってしまう。

全体からみれば、今までの日本語の授受動詞構文、特にいわゆる本動詞に関する研究は、文の意味、統語規則の面では網羅的に記述されたといえるが、語彙が構文に対する主導性、語彙の意味構造がどのように構成され、いかに統語規則に現れるのかという統語一意味論的インタフェースの面からの解釈はまだまだ足りない。更なる解釈が必要とされるところを次の4点に絞ってみた。

①日本語の授受本動詞ヤル・クレル・モラウの三分化の成立およびその構文特徴に、三つの動詞が持つどんな意味要素が働きかけているのかについて従来の研究には明確とした解釈が見られていない。

②①の関連問題として、ヤル・クレル・モラウ及びその補助動詞文の特徴として取りあがられた「視点」「共感度」「方向性」「恩恵性」の本質は何なのか、また、それが三動詞の意味構造内でどう位置づけ、その構文構造にどう対応するのか、従来の研究では曖昧のままである。

③授受本動詞から授受補助動詞への拡張に関しては、「物の移動」から「行為の移動」への転換として捉えているのが主流だったといえよう。「物の移動」「行為の移動」という言い方自体からわかるように、その捉え方は、本動詞構文ではヲ格名詞句、補助動詞構文では前接動詞に焦点を当たっているのである。その結果、本動詞が有する恩恵性をヲ格名詞句の「物」に求めたり、補助動詞文では、前接動詞の意味を一方的に語ってしまうことになる。勿